

食品に関するリスクコミュニケーション（東京）  
- BSEに関する講演会 - 概要（未定稿\*）

1. 日 時：平成16年4月20日（火）13：30～17：00
2. 場 所：ホテルフロラシオン青山（東京都港区）
3. 主 催：内閣府食品安全委員会、厚生労働省、農林水産省
4. 参加者：292名（消費者、食品関連事業者、自治体関係者、報道関係者等）
5. 議 事
  - (1) 開会
  - (2) 開会挨拶 寺田雅昭 食品安全委員会委員長
  - (3) 講演

「欧州におけるBSEに対する食品安全施策について」

ウルリッヒ・キム 前スイス連邦獣医局長

BSE対策には、リスクを評価し、管理するリスク分析手法が有効である。家畜衛生、公衆衛生、環境、貿易関係の4省庁が協力し、施策の施行状況のコンプライアンスを高める必要がある。また、国民の信頼を得るためには、正直で透明なリスクコミュニケーションが不可欠である。

【講演 に対する質疑】

会場： BSE完全撲滅のためには、全頭検査がどのくらい有効か。

キム氏： 英国では、30ヶ月齢以上の牛は食用に供していないが、いずれ検査して供するようになるだろう。考えられる対策をすべて行えば、感染の危険性は限りなくゼロに近くなるが、何らかの交差感染も考えられ、結論は5年、10年たたないとわからない。

会場： 30カ月齢以下の牛の検査は不要か。

キム氏： 欧州の経験から30ヶ月齢以下の感染性は実証されていないので、検査は意味がない。ただし、新しい知見が出てくれば、この限りではない。また、検査については、検査法が問題なのではなく、「検査部位（＝脳）」が重要である。

講演

「BSE（牛海綿状脳症）と、その食へのリスクについて」

金子清俊 国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第7部長

孤発性クロイツフェルド＝ヤコブ病（CJD）は、自然発生型で、日本でも年間100万人に1人の発症がある。

現在、BSE感染の危険性は、牛乳、肉などでは確認されていない。動物種、プリオン種の差は大きく、ネズミなどの知見をすぐ適用することはできない。

特定部位の除去で、現在95%以上の感染力は完全に取り除かれ、人の口に入らないことは担保されているが、さらに細かく危険な部位を特定していく必要がある。また、現在の日本の検査感度は、必要にして十分である。

\*本資料は、各発言者など出席者による確認を経ていない未定稿であり、今後修正の可能性がある。

【講演 に対する質疑】

- 会場 : 孤発型CJDがふえる傾向にあるとの説明だが、その原因は何か。また、BSEは潜伏期が長いとのことだが、これから発症者が増加するのか。
- 金子氏 : 孤発型CJDの増加の原因は現時点ではわからない。BSEとCJDの関連性はないと考える。
- キム氏 : 種別分類して株ごとに実験しているが、関連があるかどうかまだ不明だ。
- 金子氏 : 変異型CJDは、今後増えたとしても数百名ではないか。
- 会場 : CJDについては、死亡原因としての把握の方法が変化している。

(4) 会場との意見交換

- 会場 : 日本の全頭検査は、どのくらいの費用をかけて、どの程度の確率を取り除くために検査しているのか明らかにしてほしい。
- 金子氏 : 感染するプリオンの最小個数についてもいろいろなデータがある。現在の検査で必要にして十分な精度が担保されている。そのことと全頭検査の意味は別のものである。全頭「検査」していることよりも、全頭「特定部位を取っている」ことが重要であると思う。
- キム氏 : 明らかなのは、特定部位を取り除くことで、感染率を下げていることにつながっている。  
サーベイランスは、BSEの浸潤状況を把握するものであり、大事なことは特定部位を取り除くことである。  
日本を含めて世界各地で研究が行われているが、結果を得るには忍耐力が必要であり、現時点で白・黒といえる問題ではない。30ヶ月齢以下でプリオンを発見することはほとんど不可能である。
- 会場 : BSEに関しては不確実なことが多いので、消費者に安心を与えるためにも今後ともぜひ全頭検査してほしい。
- 会場 : 全頭検査の必要性については科学的観点のみでなく、政策的にも慎重な検討が必要だ。
- 会場 : 生産者や消費者はやはり「イエス・ノー」の答えを求める。「検査済み」ということが安心感を与えている。
- 会場 : 日本で24ヶ月齢未満の若い牛がBSE陽性になった例をどうとらえるのか。
- 金子氏 : 様々な疾病で見られるように、個体差がある。
- キム氏 : 現実には我々は24ヶ月齢未満の牛を食している。こういった若い牛の感染性は陰性になる。つまり、「検査」よりも、若い牛であろうがなかろうが、特定部位の除去や死亡前牛検査等の、より有効で有益な所に予算をまわすべきである。実際特定部位の除去は非常に難しい技術と管理が必要なことを理解してほしい。

(5) 閉会挨拶 小泉直子 食品安全委員会委員

## 「食品に関するリスクコミュニケーション（東京）」

### アンケートの集計結果

開催日：2004年4月20日（火）

参加者数：332名 回答数：174名（回答率52%）

- 問1 ご自身について、ご回答ください。
- |  |    |       |
|--|----|-------|
| 1) 消費者   | 14 | 8.0%  |
| 2) 食品関連事業者   | 57 | 32.8% |
| 3) 食品関連団体  | 31 | 17.8% |
| 4) 研究機関  | 5  | 2.9%  |
| 5) 行政関係  | 42 | 24.1% |
| 6) マスコミ関係  | 9  | 5.2%  |
| 7) その他   | 13 | 7.5%  |
| コンピュータソフト会社、在日在外交館員、飼料販売、獣医師、<br>有機肥料輸入専門商社、外食、コンサルタント、脂肪酸他製造業、<br>外国公館、一般企業、小売業 |    |       |
| 無回答  | 3  | 1.7%  |
- 問2 本日の講演会は、何かからお知りになりましたか。
- |  |    |       |
|--|----|-------|
| 1) 食品安全委員会のホームページ  | 80 | 44.9% |
| 2) 食品安全委員会からのご案内資料   | 30 | 16.9% |
| 3) 都道府県等自治体からのお知らせ   | 1  | 0.6%  |
| 4) 関係団体からのご案内資料  | 39 | 21.9% |
| 5) 知人からの紹介   | 8  | 4.5%  |
| 6) その他   | 20 | 11.2% |
| 厚生労働省のHP（プレスリリース）(3)、厚労、農水HP(5)<br>農林記者会(1)、農水省から(3)、農林水産消費技術センターメールマガジン(1)<br>食の安全・安心メールマガジン(2)、業界情報(1) |    |       |
- 問3 本日の講演についてお伺いします。講演内容について、十分に理解することができましたか。
- |              |     |       |
|--------------|-----|-------|
| 1) 理解できた     | 48  | 27.6% |
| 2) だいたい理解できた | 112 | 64.3% |
| 3) あまりできなかった | 12  | 6.9%  |
| 4) できなかった    | 1   | 0.6%  |
| 無回答          | 1   | 0.6%  |
- 附問3 - 1（問3で「理解できた」「だいたい理解できた」と回答した方）  
内容がわかりやすかった点はどこですか。当てはまるものは全てご回答ください。
- |                     |    |       |
|---------------------|----|-------|
| 1) 説明が明瞭で的確だった      | 92 | 40.2% |
| 2) 資料内容が平易でわかりやすかった | 96 | 41.9% |
| 3) 適切な説明時間が確保されていた  | 32 | 14.0% |

4) その他 9 3.9%

- ・金子先生の話は、良く理解できた。
- ・もっとマイクの音量をアップしてほしい。聞き取りにくかった。
- ・同時通訳がよかった。
- ・説明と図(スライド)のダブル講演であったから。
- ・少し早口で、書き取れなかった。
- ・学問的説明不足(時間制約)。
- ・BSEについて、少しだけ調べてきたので。
- ・意見交換が良かった。
- ・目新しい話がなかったので、ほとんど知っていたから。

附問3 - 2 (問3で「あまり理解できなかった」「できなかった」と回答した方)  
内容がわかりにくかった点はどこですか。当てはまるものは全てご回答ください。

1) 説明に専門用語が多い	9	24.3%
2) 資料がわかりにくい	9	24.3%
3) 聞き取りにくい	10	27.0%
4) 適切な説明時間が確保されていなかった	1	2.7%
5) その他	8	21.7%

- ・同時通訳が早口。不明瞭であった。
- ・大切な部分(一例を挙げると、キム博士の講演で、8ページ「仮定」をあっさり通過したが、仮定に至る根拠)を説明されていない。
- ・科学的視野からの考察が、いまだ強いと思います。
- ・日本におけるリスクコミュニケーションの方法、あり方にもう少しふれてほしかった。
- ・話のテンポについていけなかった。金子先生の話は、ゆっくりと話され、わかりにくい話をよくかみくだいて、分かりやすくよかった。
- ・同時通訳者が専門家でなさすぎるため。質疑応答くらいは、同時ではなく、発言後、的確にまとめてポイントをおさえて訳してみても...。講演については、講演者の原稿を事前に準備し、訳しておいたらどうか?

問4 BSE問題について、どのようなことにご関心がありますか。ご自由にご記入ください。

- ・全頭検査に必要性について(11)
- ・米国からの牛肉の輸入再開時期について(7)
- ・生前診断法の開発。
- ・日本の検査体制のすばらしさを、改めて認識しました。一方、米国のBSE発生後の対応について、経済界や食品業界(大手・商社)の動きは、消費者の不安を増長させているのではないのでしょうか。本日の、講演の中でもありましたように、危険部位の除去について周知し、安全に対する対応を実施している事を周知するとともに、輸入肉に対しても、我国同様の措置を取るようになっていくべきではないか。(もし、しているなら、周知と啓発が必要と思われる。)
- ・危険部位の完全除去方法は?
- ・SRMの除去。
- ・検査をSRM除去の、何れか有効性があるか、かなり分かったつもり。人に対する危険性。また、日本に輸入される際、完全に検査されているか。

- ・検査だけでなく、濃縮感染部分の交差汚染の防止が必要。
- ・全頭検査体制の再評価と、特定危険部位除去の有効性の確認。
- ・蒸製骨粉他、有機肥料原料の輸入解禁（再開）。つまり、危険部位を除去した原料（骨のみ）でOIEの基準を100%満たした条件で製造された、蒸製骨粉の輸入解禁！全頭検査よりも、危険部位を取り除くことに重点をおき、早めにアメリカ牛肉の輸入再開してほしい。
- ・全頭検査の必要性より、SRM排除がより有効。
- ・牛肉の安心のためのBSE全頭検査という。原因究明のための全頭検査を強調してほしい。世界で日本EUしか全頭検査をしていない現状で、日本から世界へ提言すべきでは。全頭検査より、SRMの全頭除去、トレイサビリティ、牛肉骨粉の交差汚染の防止がUSAへ輸入再開の条件とすべきと考える。
- ・消費者の安全、安心のために、全頭検査は必要か？（特定危険部位の除去か。）
- ・「全頭検査」の言葉に消費者は信頼しており、現在の知識からみて、かなり無駄な対策のように思う。SRM除去がどの位、的確に実行されているか、その実態を政府は国民に、情報公開する必要があると考えます。
- ・検査法の進歩。
- ・BSE問題について、リスク評価やリスク管理がまだ不十分な状況にあることを理解しました。研究もこれから進んでいき、原因や対策が究明されるまでに、まだ多くの時間がかかることを知りました。また、リスクコミュニケーションの大事な事や大切さを知り、国民一個人として、より多くの判断できる情報の提供を望みます。
- ・日本の牛肉は全頭検査をしているが、輸入牛に関しては全頭検査をしないまま、goになってしまうように思う。日本の生産者を守る為にも、同じ基準にたたないと公平でない。
- ・今後の畜産について、自然発症的に、BSEが起こる可能性について。食する部位について、新たなリスク部位。
- ・なぜ、H8年3月、4月生まれに集中するのか。代用乳の疑惑はどうなっているのか？一工場の代用乳か、全ての牛に関与しているのに、疑わしきは公開するべきではないか。
- ・安全性としての限界。24ヶ月齢 - 30ヶ月齢、実際として、どの辺りが適切か？感染源・経路の究明。全頭検査の必要性。政府の対応。消費者等への情報提供。
- ・自分たちの子供に対する危険性が、あるかどうか一番関心がある。
- ・検査月齢について。米国の状況。
- ・クロイツフェルドヤコブ病について。実際の発症率がどんなものか、高いリスクを避けるためには、どうしても知っておきたい。BSEとの本当の関係。
- ・BSEとvCJDの真の関連性の有無。非常に難しい問題ですが、BSEに関して正確な答えが見つかっていないのに、QUESTIONが多すぎる。いつでも明確な答えを求む。
- ・vCJDへの移行確率。
- ・BSEの日本での発生は、間違いなく農水省の失政である。全頭検査は税金のムダ使いである。SRMの除去処理を、しっかり構ずれば、全てコト足りる。
- ・今後、畜産残渣物のリサイクルは考えられるのか？できなければ、コストは増大し、そのコストは誰が負担するのか？
- ・全頭検査に至った科学的理（データの公表）を示せ。HP等でもOK。
- ・飼料等のリサイクルの問題。
- ・日本のBSE検査の知見を有効に利用する。国際的な見地で、現在の全頭検査を早急

- に見直してほしい。近親的国民の安心の為に、他の国々にも大きく影響を与えており、もっと長いスパンで食料の確保等も視野に入れて考えるべき。
- ・食については自己責任であり、国が規制すべきことではない。
  - ・BSEの主原とされる、異常プリオンについて、一般向けに解説がされている場が少ないと思われる。
  - ・日米で全頭検査を、実施するかどうかということ。
  - ・風評被害を最小限にしたい。アメリカより、早期に輸入を再開すべきではないだろうか。
  - ・なぜ日本国はプリオンのリスクのない牛肉の精肉の輸入を再開する努力を、多角的にできないのか？なぜ科学者はもっとその中に科学的立場で入っていけないのか？
  - ・アメリカの全頭検査は、日本が援助したらどうか。
  - ・書類、形の整備に注力して、本筋を見逃してしまっていないか。原因究明は、そろそろ答申が出てほしいもの。
  - ・全頭検査の意義、効果、費用負担の問題。リスクとのかねあい。
  - ・パネルディスカッションによるリスクコミュニケーションという方法を、行政、消費者、生産者、学者、流通業者等、幅広い分野から参加して頂き、ポイントをしばった形で実施してください。<もちろん、賛成、反対の意見が対等であることが条件です。>この内容を農水又は厚労省のホームページにアップしてください。この様なセミナーには参加したくても、時間の関係で参加できないことがある為。
  - ・米国で1億頭もの牛が\*\*されているが、人間へのBSEの感染例は皆無なのか？
  - ・安全と安心の折り合いをつけた落としどころ。
  - ・日本における食肉牛の、全頭検査に対する諸外国、OIE等からの専門的な面からの意見、評価。
  - ・BSEに対する諸外国の対応と日本の違い。日本の対応は、完全と思われるが、安心面に対して、外国に同調してもよいのではないか。
  - ・日本と諸外国の対応の違い。どのくらい深刻な問題なのか。(身体への影響)
  - ・全頭検査体制の、今後及び主たる供給国である米国と豪州の対応。
  - ・BSE感染。月齢による差異。学問的説明不十分。
  - ・米国では食べて問題がない。日本では輸入できない理由？(米国の人の主食=肉(牛)だから？)
  - ・BSEに関する諸外国の対応。vCJDとの因果関係。
  - ・プリオンはなぜ熱安定性が高いのか。変異型CJDとBSEの関係。
  - ・「非定形型BSE」が昨年9月に確認されているが、この非定形型BSEは定形型BSEの前駆的状態なのか？「非定形型BSE」は全頭検査をやったから発見できたのか？「非定形型BSE」は「定形型BSE」と同じ伝達性があるのか？
  - ・牛BSE検査体制の意義。30ヶ月齢以前の中的全頭検査の必要の有無について、自分なりに理解できた。国民の意識の向上が必要と思われた。
  - ・BSE規制(医・食)のハーモナイゼーション。
  - ・全頭検査は、今後も継続すべきか。米国からの輸入牛についても、全頭検査を要求すべきか。
  - ・「安全」と「安心」のギャップをうめる為に必要なことは何か。消費者側に立った視野を業者が持っていけるか。人間に対するBSEの危険性。
  - ・各国でのBSE対策が異なる場合、1)食品の安全、2)BSEの駆逐の2つの点でstand\*eeすることは可能か。また、Dr. Kimのリスクコミュニケーションに対する提案。

- ・ B S E 対策の国際的動きの内、特にヨーロッパ方面の動きがよく理解できた。
- ・ 死亡牛、全国での検査の検査期間。今後の食肉行政の方針。
- ・ 1 . 全頭検査は本当に必要か。 2 . B S E が見つかり、酪農家は殺されてしまうような体制で、本当に「あやしい中」が見つかるのか？ 3 . どのようなルートで B S E が日本に広がったのか、本当にわかっていないのか？等
- ・ 日本における食品としてのリスク。
- ・ S R M 除去により、肉の安全性が確保されるのであれば、何故 B S E T e s t P o s i t i v e の牛肉を食べることを、どの国も認めていないのか説明してほしい。 B S E T e s t 陰性が B S E 非感染を意味しないのであれば、 B S E 感染実験により、検知できないことも、 B S E 非感染を意味しなくなるが、それで良いのか明らかにしてほしい。
- ・ 飼料会社の安全性担当をしていますが、生産現場（農家）でのコンタミネーションを完全に防止し、そのことを確実に検証することの困難なことを、身をもって感じています。行政も、現場の隅々まで施策が確実に実行されていくことに、人と力を投入すべきと考えます。
- ・ 日本独自の全頭検査が、本当に“安全”に寄与しているのか？今日の話聞いても、科学的根拠より、何かやらなければという場当たりに思えた(厚生、農水のポーズ！)しかし、なお最近 U S A に行くが、まだ C N N でも「狂牛病」と言いますね。 B S E のことを全く気にせず、牛肉をガバガバ食べていますね。アメリカでのリスクコミュニケーションは？
- ・ B S E 発生国別のリスク管理が重要か？特定危険部位が、はっきりしている以上、部位別管理でも十分ではないのか？加工品に混入される恐れがあるとは言え、発症リスク(率)は相当低いと思われる。・牛用の飼料コントロールが、優先課題ではないか。・ B S E 発生( B S E が確認された危険部位)部位による臨床検査、エサとして与えた場合の発症率はどうか。リスク度合がよくわからない。講演前に記載したが、キム氏の説明でほぼ理解できた。日本の一般市場に出回っている食品の B S E 関連リスクは、どのくらいか？
- ・ 情報が非科学的である。
- ・ カプセルに使用されている牛のゼラチンについて、今後どう取り扱われていくのか。( B S E がなくなる日が来るのか～使用禁止となるのか。)
- ・ 日本の全頭検査( B S E )と米国、欧州との検査体制の違い。また、その考え方やリスク確率の対比違い。特に我国では 2 1 ヶ月の発症があり、外国は 3 0 ヶ月以上を目安にしている点から、我国の検査優位性による消費者、生産者の信頼回復につながっている点を強調し、他国への普及への努力は必要と思われる。 O I E も再度月齢降下し、 2 0 ヶ月以上検査体制にもっていくことを望む。
- ・ トレースの証明方法。検査内容及び証明書の発行。法整備。偽装問題。税金の使用。
- ・ 安全、安心を確保するために行う、実践的な情報開示法。
- ・ 全頭検査による安全性確保の信頼性。感染牛が検査をすり抜けて、食用にまわっていると聞く。感染源が何なのか、どこからきたのか。
- ・ B S E 全頭検査の是非。科学的根拠とコスト見合いがどうか。
- ・ 輸入牛の中で、 B S E 非発生国の牛は全て安全といえるのか？
- ・ 全頭検査と安全性。日本の行政の B S E 対策の考え。リスクコミュニケーションの重要性。
- ・ 輸入規制における衛生条件を、国際貿易の中で、どう扱っていくか。

- ・プリオンそのものがまだ完全に解明されていない中、今後、予想しなかった事態が生ずる恐れがあるかもしれない気がする。そう言った観点から、今後あらゆる角度から、BSEについて研究する必要がある、リスク分析する必要があるものと考えます。
- ・リスクコミュニケーションを有効に機能させるための、強力な指導者（カリスマ）をどのように立てるか。（科学的に正しいことを、伝えるために、どのような戦術を用いるか。）いつまで無駄なお金をつぎ込んでまで、「人のvCJD」に対する過剰な対策を続けるのか。（BSE対策としても、vCJD対策としても、今の日本の対策は過剰。）少なくとも「BSEのサーベイランス」と「食肉の安全性」は、別に考えた方が...
- ・現状の体制、知見において、食品業界がどのように対応しているか。また、どのように対応する事が望ましいと国、消費者が考えているか？
- ・「なぜ全頭検査が必要（不可欠）なのか」に関する説明が必要と思う。それは、どの程度、科学的根拠に基づいているのか？OIEなどとの見解となぜ異なるのか？などなど。生産者や食品企業の「コンプライアンス」について、現場での状況を的確に伝える情報収集等、システムを構築すべきではないか。
- ・米・カナダの原料（工業用牛脂（食添の原料）、医薬、化粧品原料）について、SRMの除去は、されているのかどうか。なぜ、明瞭にならないのか（明瞭にしてほしい）。全頭検査が本当に必要かどうか。数値的にリスクを示してほしい。金額がかかりすぎ、検査の精度が明らかでない。95%の信頼では、やっても意味ない。これら全体のリスクを示していないで、続けるのか。政府は選挙前の点数稼ぎに、全頭検査をやめないだけではないのか。
- ・どうして起こるのか、メカニズムについてとても関心がある。何も分かっていないのだから、説明くらい分かりやすく、早く対応してほしい。米国BSEの時において、吉野家の対応、情報のたれ流しは、やってはいけないことと思う。
- ・現行の日本の対策の善し悪しと、変更された場合の消費者に対する説明の仕方について。
- ・各国の対応のバラツキと、統合へのステップ（認識の統一）。
- ・食肉は安全とされているのだから、もう全頭検査は中止にして良いと思う。そのフォロー以前に、まさに、正しい情報提供がされていないことが問題だと思う。
- ・流通業者として、何を気付かなければならないか。表示（製造業者による）の規制は今後どうなるのか。
- ・米国からの牛肉輸入再開条件と、国内での施策との整合性があるかどうか？
- ・科学的な知見について、分かっていること、分かっていないこと。同じ知見に対する様々な異なる専門家の見方を、まとめて示してほしい。
- ・欧州の現状がよく分かった。
- ・質問の中にもあるように、まだBSEについて不明である点を公表した上で、リスクミすべき。
- ・BSEが、何故、発生してしまったのかのメカニズム。リスクを0にできないのであれば、どのようにその事実を消費者に説明するか。潜伏期間中であれば、仮にその牛を食しても安全か？
- ・BSEの検査基準が、何故、世界的に統一されないのか？されるのであれば、いつされるのか？
- ・全頭検査の再評価が課題であり、食品安全委員会の指導力が試されていると思う。安全委員会に対する農水大臣の発言は不遜。
- ・危険性等を、正確にどのようにして国民に伝えていくつもりなのか。
- ・垂直感染のリスクはないものとして考えてよいのか？発症牛の全てが乳牛なのに、そ

の仔牛についてもコメント追跡調査が、レポートを見る機会がないのは、不安となっている。

- ・ 米国が全頭検査に何故応じないのか。
- ・ 飼料工場でのクロスコンタミネーションを、早く、容易に検出できる手法の導入が必要と考えます。(マイクロトレーサーの導入)
- ・ リスクの可能性。リスクの考え方。
- ・ リスクコミュニケーションの進め方。そのための情報。
- ・ 何故、アメリカは全頭検査を業者が自主的にしたいのに許さないのか。21月齢、23月齢で30月齢以下の検査方法？BSE(+)を認めないのはなぜか？見解の違い、実証されてないと判断。今いち納得できない。
- ・ アメリカ(北米)BSEの状況。全容検査の今後の有効性。
- ・ BSEの原因が完全に究明されていない。全頭検査で安心してよいのか。もし、オーストラリアで1頭でも発生したらどうするのか。
- ・ 20ヶ月以上の検査にし、アメリカからの輸入を再開した場合の、牛肉の消費者ばなれ。

附問4 - 1 上記の関心点について、今回の講演会は役に立ちましたか。

1) 大変役に立った	21	12.1%
2) 役に立った	86	49.4%
3) あまり役に立たなかった	22	12.7%
4) 役に立たない	6	3.4%
無回答	39	22.4%

問5 今回の講演会についてご意見・ご感想などございましたら、ご記入ください。また、リスクコミュニケーションに関するご質問・ご意見などもございましたら、あわせてご記入ください。

- ・ 講演会は成功であったと思います。他の食品の安全性についても、このような講演会をお願いします。
- ・ 安全のみならず、安心をどのように確保するか、周知していくために、もっと分かりやすい啓発活動をお願いします。
- ・ キム氏講演資料のP48。www.bse.chの邦訳を載せてほしい。カラー版で今回の資料をHPに載せていただきたい。赤と黒の識別ができない箇所がありました。
- ・ リスクコミュニケーションの重要性はよく理解できた。より効果を高めるために、参加者の知識レベルを区切った企画も検討してみても感じました。また、特に、一般消費者向けのリスクコミュニケーションは、地方自治体が重要な役割を果たす必要があると思います。
- ・ リスクリダクションとしてSRM除去は理解できる。(全頭検査とSRM除去の両立はクエッション)しかし、消費者の感覚は「Healthy Animalから作られた製品」であることが、メインのように思う。健康でない動物のSRMを除去しても納得しがたいのでは？
- ・ キム氏には、日本の対策についてのコメントを頂きたかった。何が適切な措置であるのかを、グローバルな視点で述べて頂けると良いと思った。リスクコミュニケーションは大切であり、消費者にゼロリスクはない事を知らしめる必要がある。
- ・ 今回は、米国内の輸入再開を意図しているのかなと感じてしまったが、国は、少しの疑いのある事項でも、リスクコミュニケーションが必要！情報公開すらイヤがるよう

な政府は問題。

- ・とても分かりやすい説明だった。講演者のまとめが、資料に書かれていたら、持ち帰って復習に役立ったのではないかと感じた。食品安全委員会のホームページには、検討結果について、もっと一般の人に分かりやすい説明を掲載すべきだと思う。現在は、あまり実用的ではない。
- ・全国で回数を増やしてほしい。
- ・日本政府の対策など。
- ・基本的内容でありすぎた。今は、リスクアセスメントの在り方に関心がある。(データの蓄積による、アセスメントの見直しがあるのは当然ではないか。)
- ・リスクの確率的評価が消費者(事業者)には、伝わらない。例えば、v C J Dになる確率が、いかに低いか(食中毒に比べて)といった広報をして、いたずらに危機感をあおらず、冷静に消費者が考えられるような取り組みをしてほしい。
- ・大多数の国民のB S Eについての理解、認識は、間違っているか、十分でない。このような機会やもっと一般の国民とのリスクコミュニケーションを目指すための方法論が必要である。
- ・神経研究所の金子先生による、プリオンについての講話は参考になりましたが、是非もっと詳しい解説をテレビ等で広く周知されたい。
- ・「リスクコミュニケーション」という語句自体がわかりにくい。できるだけ多くの方が参加できるよう、広い会場でやってほしい。有料(@1000円くらい)なら可。
- ・大変有用であった。また時々行ってほしい等。
- ・食の供給、グローバリズムは日本に欠かせない事。この点で、リスクコミュニケーションはグローバリズムをふまえた上での、リスクコミュニケーションが望ましい。
- ・数値的な危険回避があるとなお良かった。
- ・講演会。一般向けと専門家向けと区別しては? 社会科学的分析の必要性は?
- ・強く印象に残った言葉は、キム博士の「大変だったが、我々は学んだ。」ということです。リスクの社会的な受容は、対話によるコンセンサスによるのだと思うのですが、賢い合理的な管理施策にたどりつけるか否かは、国民の理解力とリスクコミュニケーターとの力にかかっていると思います。食を巡る社会的なロスをセーブしながら、安心できる食の提供を確立する道のりは、まだまだ遠いと感じています。「スイスと同様の対策をとれば、スイス同様の安全性を得ることができる。」とのキム博士の言葉も印象に残りました。
- ・若齢牛におけるB S E検査陽性例について、それがどの程度まれな例であったのか、数字で示してほしいという意見があったが、講師はそれに答えていないと思われた。数字で示せないのなら、示せないとはっきり言うべきと思う。
- ・講演は先生だけでなく、消費者代表、または業者代表など様々な関わり方をしている人に出てもらった方が、皆、意見がしやすいと思います。
- ・Dr. 金子の講演はリスクコミュニケーションというテーマの関連でいえば、ポイントが少なかったような気がする。
- ・スライド内容もよく理解できる。コミュニケーションの難しさが研究者、行政、消費者、メディア等で大きな差があります等。
- ・専門家によるリスクコミュニケーションの内容を学び、レベルを上げるのも重要だが、消費者にマスコミを通してどのように分かりやすく伝えるかが、今後の消費者の食の安心になると思う。
- ・全頭検査は、現在の所あまり意味がなさそう。(若い牛についての検査はイレギュラー?(21ヶ月の))らしいが、今後日本の検査に反映されるのか? リスクにつ

いての考えも、もっと広く日本人に伝えなければ、なくなるのでは、防ぐためのコストの問題等。

- ・日本人の最も不得手とする部分です。消費者に初動段階で、正しい科学的情報を確実に提供することに力を入れる必要があります。本年発生した、トリインフルエンザに伴う、卵、鶏肉の消費の落ち込みを見ても、まだまだリスクコミュニケーションに力を入れる必要があると考えます。
- ・BSEに片寄りすぎ～その通りで、もっと深刻なリスクはある。費用対効果で見れば、BSEは二の次。
- ・リスク管理及び費用対効果について、農水省からの意見を聞きたい。何故、行政側は黙っているのか？
- ・貴重なお話を聴くことができたと思っています。今後も様々なテーマでの開催を期待します。
- ・受ける側は、リスク0を求める。リスク評価では、+・-があるだろう。管理は不信のところがあるだろう。+・-情報の提供が重要では。
- ・科学者としては、断定的な事を言えないことは理解できるが、我々より見識は高いのであるから、もっと我々を正しい方向に導くように話してほしい。でないと、誰も答え（なすべき事）を見つけれないと思う。厚生省にBSE検査にかかるコストを、国民にわかりやすく公表してほしい。例えば、30ヶ月以下の牛の為に、いくら使っているか等。
- ・リスクコミュニケーションについて、戦略論は分かりきっているのだから、日本における戦術を考えていった方がよいのではないかと。今回の内容について、一般に影響力があるマスコミが、きちんと伝えてくれるかは疑問。彼らの立ち話を聞く限りでは。
- ・手持ちの資料をOHPだけでなく、発表内容についてもほしい。
- ・今回の企画、内容とも、非常によかったと思う。
- ・リスク分析のしぐみが良く理解できた。また、BSEのリスク分析は、リスク分析の課題としては、かなり高度なものであり、もっと簡単な課題も聞いてみたい。
- ・全頭検査の見直しについて、賛成ですが、どうしても伝え方、時期が米国輸入牛肉とダブってしまい良い印象を持ちません。いっそ、はっきり言ってしまった方がよいと思います。そのための説明に全力を上げる方がよいのでは。
- ・食品安全委員会は、全頭検査を止めさせるために、マスコミ操作を考えていると思う。
- ・今月は、プレスがリスナーとして十分知識情報を提供していて、有効だと思う。是非、持帰った内容を、一般の消費者向けに正しく、多く、発信してほしい。期待します。そのことが全体を動かすと思う。そして何より、キム先生のお話を聞くことができ、大変嬉しかったです。スピーカーが「専門家」を前にして、こんなことを言うのは、恥ずかしいというのは間違い。聞いているのは専門家ではない。
- ・非常に意義深い会であったと思います。政府、省庁が本腰を入れているということが、食の安心感を高めると共に、基本的理解を深めることになるので、継続して頂きたい。宜しく申し上げます。
- ・未だ研究分野だけあって、「不明」な部分が多かったのは残念だった。SRM除去こそが、安全性の確保への確かな道であることが理解できたのが良かった。
- ・問4のこと（科学的な知見）はBSEに限らない。残留農薬、バイオ、添加物など、どの分野でも重要。金子先生の「リスクコミュニケーションは「決定」をコミュニケーションするのではなく、「決定するまでの過程」のコミュニケーションが重要」との話が印象的だった。

- ・食の安全に国民の関心が高いのは良いが、感情的に施策をとるのは良くない。
- ・食品安全委員会から、一方的に意見をうえつけているように感じられた。
- ・リスクを管理するのに、命に関する事ですが、やはり費用対効果については、議論が必要と思います。
- ・今回の講演会で、確かに国民に全てを透明にするのは。
- ・リスクコミュニケーションの1つの場としての今回の講演会は、良かったと思うが、科学的なことを全て理解できない人々に、どうして伝えていくのか、もっと考えなければならぬのでは。
- ・ホームページ等を利用したコミュニケーション(Q & A)。
- ・キム先生の「1ミリグラムでも摂取すると発症するかもしれない」のコメントは、リスクの大きさでもあるように思われた。30ヶ月以上の牛は残るリスクを考えると、販売するべきでないと考えの方が望ましいのでは。
- ・モニターが見つらい。
- ・今回の通訳は、歯切れがよく、よく分かった。講演会場はもっと広く、机のあるところを使用してほしい。
- ・同時通訳の精度が悪すぎる。もう少し、専門的知見をもった者を選任すべき。
- ・同時通訳の方の一人が、英語まじりの訳をされていた。できるだけ、正しい日本語に訳してほしい。
- ・同時通訳の方々に、もう少し専門的な知識(事前に想定される用語)の準備をしてほしい。
- ・内容はよかったですと思います。講演会の場所について、机のある所を希望します。
- ・椅子の間が狭く、肘があたるので、もう少し広い会場で、ゆったりと聞けるスペースがあるとよい。
- ・おもしろく聞かせていただいた。次回からは、机が付いているとメモも取りやすいので、できれば机とイスが一体になっているような設備を使ってほしい。
- ・もっと広い会議場を設定してほしい。机は必要です。

問6 今後、食品安全委員会におけるリスクコミュニケーションとして行ってほしい取り組みは何だと思われますか。当てはまるものを全てお答えください。

- |    |                                    |     |       |
|----|------------------------------------|-----|-------|
| 1) | 今回のような有識者による講演会(質疑応答含む)の開催         | 113 | 29.8% |
| 2) | 基調講演やパネルディスカッションを盛り込んだ意見交換会の積極的な開催 | 78  | 20.5% |
| 3) | 食品の安全に関する平易で基礎的な勉強会の開催             | 81  | 21.3% |
| 4) | 参加者全てが発言できるような、少人数の座談会の開催          | 14  | 3.7%  |
| 5) | 消費者、生産者、事業者が意見をいつでも言える窓口の設置        | 51  | 13.4% |
| 6) | 地方における意見交換会の開催                     | 30  | 7.9%  |
| 7) | その他                                | 13  | 3.4%  |
- ・ 地方における講演会。
  - ・ マスコミ等を利用した情報提供など、マスコミ、メディアの有効な活用。
  - ・ 国内だけでなく、海外の有識者も含めたディスカッションを行ってほしい。
  - ・ 青少年、子供たちへ分かりやすい勉強会。
  - ・ メーカー最先端話し。
  - ・ 一般消費者に向けての、基本的な啓蒙活動および厚労省、農水省への同様な取り組みのサジェスション。
  - ・ 肥料、特に有機肥料。
  - ・ 消費者向けのセミナー。

- ・ 総理なり、担当大臣によるテレビからの、国民への直接の呼びかけ。
- ・ 正しくリスクコミュニケーションできるカリスマの確立。
- ・ 委員会のHPやメディアによる「食」の情報発信。
- ・ 聞く者に関心を持たせるような内容。

問7 今後の講演会や意見交換会で取り上げてほしいテーマは何ですか。当てはまるテーマを3つまで下記から番号でお答えください。

1) 留農薬に関するテーマ	63	14.1%
2) 食品添加物に関するテーマ	55	12.3%
3) 遺伝子組み換えに関するテーマ	52	11.6%
4) 食品中に混入する汚染物質に関するテーマ	33	7.3%
5) 動物用抗菌性物質(いわゆる抗生物質)に関するテーマ	47	10.5%
6) 害微生物に関するテーマ	26	5.8%
7) 輸入食品に関するテーマ	75	16.9%
8) 食品表示に関するテーマ	58	13.0%
9) リスクコミュニケーションに関するテーマ	38	8.5%

問8 このような講演会や意見交換会にご参加していただきやすい開催日時は、いずれですか。

1) 平日の午前	8	4.6%
2) 平日の午後(1~5時頃)	142	81.6%
3) 平日の午後6時以降	6	3.4%
4) 土曜日の午前	3	1.7%
5) 土曜日の午後(1~5時頃)	9	5.2%
6) 土曜日の午後6時以降	0	0.0%
7) 日曜日・祝日の午前	2	1.1%
8) 日曜日・祝日の午後(1~5時頃)	1	0.6%
9) 日曜日・祝日の午後6時以降	0	0.0%

問9 以下の食品安全委員会の取組みのうち、ご存知のものあるいは利用したことのあるものを全て選んで下さい。

1) 委員会、専門調査会の傍聴が可能なこと(原則公開とされていること)	91	21.2%
2) 食品安全委員会ホームページ	116	27.1%
3) 食の安全ダイヤル	36	8.4%
4) 食品安全モニター	46	10.7%
5) 食品安全委員会の行うリスク評価案件に関する意見募集及び寄せられた意見に対する考え方のホームページ上での掲載	53	12.4%
6) 食品の安全性に関する政府広報(鳥インフルエンザ等)	86	20.0%
7) その他 2		
・ メーリングリスト		
無回答	1	0.2%

問10 ご自身の食生活について教えてください。

気をつけていることがありましたら、できるだけ具体的にご記入ください。  
(例：加工食品は表示を確認し\*\*\*の記載があるものを選ぶ。食中毒を防ぐために加熱、洗浄を充分にする。)

- ・食品添加物の使用が少ない食品を選択しています。(11)
- ・食品表示に気をつけています(成分、賞味期限、原産地など)(10)
- ・規則的な食生活(1日3食)(3)
- ・うがい、食事前の手洗いの実施(2)
- ・販売時の保存温度の確認。原材料の調理時に充分の加熱。  
カロリー過多にならないようにしている。健康な食生活について考えている。
- ・一日でなるべく多くの食品を摂取すること。生水は飲まない。(必ず沸騰させてから飲用に使用する。) 地産地消の考え方を食行動に実践している。(野菜は地元産、肉は国産、魚はなかなか難しい。) なるべく手作りを家族に食べさせる。  
いろいろな物を食べ、腹八分目とする。
- ・サプリメントの利用。
- ・輸入品に関しては、注意をはらっている。また、なるべく無農薬のものを選ぶようにしている。
- ・塩分の摂取に注意し、また、味のできるだけ薄いものを取るようにしている。水分を多く取るように注意している。日付(消費期限)等を確認する。
- ・加工食品、調理済食品を避ける。
- ・表示はどこまで信用できるか。明確な表示のみでよい。消費者に、基準をしっかりと、わかりやすくお願いします。
- ・何でも喰う。量は気をつける。
- ・今回のBSE問題において、米の肉へのパッシングが盛んであるが、国産肉のごまかしなど、様々な問題が底にあると思う。よって、輸入でも国産食材でも、信頼のできるお店で購入するようにしている。
- ・食中毒予防。生活習慣病予防のための食事。
- ・毎日必ず豆腐・納豆などの大豆食品を摂るように心がけている。食べ過ぎには充分気を付けている。
- ・自身としては特になし。子供には気を使う。
- ・血糖値が高いため、カロリーを留意。輸入食品は、現状の管理体制では不安があるため、極力避ける。
- ・販売されているものは、安全性は余り心配していない。
- ・衛生管理のよくない見せは避ける(レストラン・スーパー)。食事の前に手洗いをする。カバーをしていないパン屋のパンはできるだけ買わない。
- ・閉会の言葉は同感です。
- ・貝毒等の生物毒化学物質に注意。
- ・1日の必要なカロリー制限。アルコール摂取量を週間で規制。
- ・なるべく素材を使った献立とすること。
- ・開封後の保存状態(冷暗所保存等)。いたみ具合を五感でチェックする。その上で、食べられるものは賞味期限が過ぎても消費する。
- ・栄養バランス。
- ・輸入食品の安全性について。表示に対する疑問(特にアジア系)の為、なるべく除くようにしている。

- ・輸入牛肉は食べない。
- ・ホールグレーンの摂取。特に大豆とゴマの摂取で、ダイエタリーファイバーミネラルを、天然穀類より取ることに心がけている。
- ・知っている食物の働きは、うっすら分かっているつもりです。しかし、初めて見る食べ物（スーパーや食品店で販売しているもの）が、何に良いかを知りたい。最低の表示基準と、少なくとも身体にとって、何に良いかを書いた表示がほしい。
- ・冷凍食品はシモが付いているのは購入しない。冷蔵食品は、積み上げられていないもの（冷機があたっていないもの）は購入しない。購入したら、速やかに帰宅する。保冷BOXを持っていく場合もある。きちんと管理されたものに対しては、消費期限にこだわらない。冷蔵庫の中で未開封でおいであったものは、期限がすぎても大丈夫。ヨーグルトは3ヶ月でもOK。
- ・表示（期限）製造（見える範囲での衛生管理）状態。生肉（牛、豚、鳥他）は食べない。
- ・食べすぎ脂肪分のとりすぎ。
- ・食品表示の原産国、添加物の有無。魚と肉のバランス（偏り防止）と野菜の必須（朝夕食取り入れ）。刺し身、肉ブロックは水で洗い流し、ふき取り後にカット。購入時はブロック冊状態を心がけている。
- ・調理後の早期喫食。加熱・洗浄の十分な実施。
- ・飲みすぎ、食べすぎ注意。
- ・いつも食品から思い健康被害を受けることはなく、おいしく、楽しくたべさせていただいていることに感謝しています。
- ・新鮮な素材を食べること。
- ・有機栽培は必ずしも安全ではない（だまされない）。低塩も疑問あり。本当に塩が悪いとは思わない。きちんとした検証はされていない。
- ・国産が基本。オーストは良いと思うが、米国の日本に対する不信感（食品）がある。
- ・持続可能な方法で生産された国内のものを、できるだけ選ぶ...自給率向上、国土保全の為。近隣の生産者から、直接供給されるような機会があれば、積極的に利用する。家人の選んだ食材には、文句を言わない。
- ・食べるものは火を通す！
- ・表示内容に不安を感じる加工品は買わない。生鮮品、米は農薬の履歴を確認して買う。外食、惣菜は店を選ぶ。
- ・完全に安全な食品は存在しないと考えているので、特に気にしていない。
- ・特に通常以上の注意はしていない。もちろん、カロリー、栄養バランスには配慮している。
- ・特に気をつけていることはありませんが、努めて多品種（野菜、魚を中心とした）のものを摂取するようにしています。
- ・運営を外部に委託しないで、農水、厚生職員の応援でやるべきでしょう。経費をたくさん使うだけよりも、頻度を上げてほしいと思います。
- ・モノにより、よく加熱する。取り扱いのよい、回転の良い店を利用する。
- ・米国産牛肉は食べない。雪印製品（メグミルク）は食べない。日本ハム製品は食べない。吉野家では食事をしない。（会長の発言から信用できない。）卵は産卵日の信用できる生産者の物を探して買う。
- ・特になし（6）